

「明けの明星のもとで」

マタイ2:1-12

エルサレムに住む人々への救い主誕生の知らせは、東方からの訪問者によってもたらされました。ユダヤの人々は、救い主が来られるのを待ち望んでいました。ですから、人々にとってこの知らせは喜びの知らせであったはずですが、ところが、彼らが示した反応は、不安を抱いたというものでした。

この時、ヘロデ王が不安を抱いたというのは当然と言えば当然でしょう。なぜなら自分の王座を脅かすかもしれない存在が生まれたということを知ったからです。けれども、なぜエルサレムの人々も不安を抱いたのでしょうか。

政治的、宗教的な指導者である祭司や律法学者は、ヘロデによってその地位と豊かな生活を保証されていました。ですから、ヘロデが王から失脚するようなことになれば、彼らも地位から追われることになるでしょう。そのことを彼らは恐れたのです。また、ユダヤの人々はヘロデの残虐さを知っていました。彼がその脅威を取り除くためにどんな仕打ちを仕出かすかわからない。だから、不安を感じたのです。

つまり、ヘロデ王も、祭司長たちもユダヤの人々も、ユダヤ人の王・救い主が生まれたという知らせに対して、今の生活が脅かされると感じて不安を抱いたのです。彼らは、それまでの生き方に固執し、今までと同じ生活が続くことを望んでいたのです。神さまの希望や慰めに期待するよりも、現実には妥協し、あきらめてしまっていたのかもしれませんが。それゆえ、メシア誕生の知らせを聞いても、喜びを見出すことが出来なかったのです。

他方、占星術の学者たちは、東の方で星のしるしを見ると救い主を探し求めて遠い道を旅してきました。当時、占星術の学者というのは、エリート中のエリートでした。彼らは学者であり、医者でもあり、政治にも口を挟めるような社会的に非常に高い地位にありました。当然、生活も安定していたことでしょう。けれども、彼らはそのような人生の”外側”の現状に妥協せず、生きる道を求めて、救いを求めて旅をしたのです。

そして彼らは、とうとうイエスさまに出会いました。その時、彼らは「ひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」とあります。これらの献げ物は、占星術を行う人たちの生活必需品とも、商売道具であったとも言われます。つまり彼らにとってこれらの物は、今までの自分たちの生活の基盤となっていた物、それまでの彼らの人生を支えてきた一番大事な物でした。しかし、それを彼らはささげたのです。そのことは、彼らのそれまでの生き方そのものを、イエス・キリストの前にささげたということです。

占星術の学者たちが救い主イエス・キリストに出会った時の大きな喜びは、彼らのこれまでの生き方を終わらせるものでした。そしてさらに、その喜びは、イエス・キリストと共にある新しい生き方へと歩み出させるのです。彼らは、キリストに出会ったあと、「別の道を通って」帰っていきました。それまでの自分の知恵や力のみで頼る生き方ではなく、イエス・キリストに導かれて生きる。その新しい生き方を歩み始めたのです。

聖書はしばしば、イエス・キリストのことを「明けの明星」にたとえています。時に私たち、不安や恐れによって暗闇に取り囲まれて、光など何もないかのように思うことがあります。また、世の惑わしや繁栄などの別の光によっても、本当の光を見失ってしまうことがあります。ちょうど真夜中や昼の光の中では明けの明星が見えなくなってしまうようにです。ですが、明けの明星なるキリストは、いつも「そこにおられる」のです。見えなくされているようなことがあっても、救い主の光は、希望は、いつもすべての人と共にあるのです。

私たちも、この星を見出す者でありたいと願います。この不安定な世の中にあっても、イエス・キリストに出会った大きな喜びをもって、キリストと共にある新しい生き方をしていきたいと願います。